

# 國學院大學學術情報リポジトリ

動詞否定形アクセント調査を通して東京のことばを  
考える：特集多様化する日本語研究の現在

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 御園生, 保子, Misono, Yasuko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000430">https://doi.org/10.57529/00000430</a>

# 動詞否定形アクセント調査を通して 東京のことばを考える

御園生保子

## 1. はじめに

2013年度から2015年度にかけて、東京方言の動詞否定形のアクセントを中心とした調査を行った<sup>(1)</sup>。主な目的は「伝統的な方言では平板型動詞の否定形は平板型」という対応の有無を検証することだった。この小論では調査結果の一部を紹介する。

## 2. インフォーマント

調査計画時に考えたのはできるだけ伝統的な、江戸の言葉を継承した東京の言葉話している話者を見つけたいということだった。アクセント辞書に載っているアクセントを持っている話者である。そのための条件を考え、2013年度は「本人が旧東京15区生育で80歳以上」を条件に27名（男性9名、女性18名）の話者から資料を得た。「2013年に80歳」で区切ったのは、終戦時1945年に12歳になっていた話者という意味で、終戦時に小学校6年くらいになっていたら戦前のことばを習得したと言えるのではないかと考えたのである。なお、1932年には東京市は35区（旧15区+新20区）に拡大したため、戦前生まれで1932年以降に生まれた新20区出身の話者は調査の対象に含めた。調査では東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学付属高等学校）同窓会の協力を得た。

2014年度は、「両親の少なくとも一方が東京23区生育で、本人が23区内生育」を条件として、1945年から1995年に生まれた話者名（男性9名、女性2名）から資料を得た。

2015年度は、都立白鷗高校（東京都台東区）の同窓会の協力を得て、その前身の旧府立第一高等女学校および白鷗高校卒業生を中心に1924年から1989年生まれの17名（男性5名、女性12名）から資料を得た。このようにして3年間で計54名の東京方言話者の協力を得ることができた。表1にインフォーマントの年齢層別・

男女別の人数を示す。

表1 インフォーマントの構成 (年齢層別・男女別)

		男性	女性	計
20-29年生まれ	3世	2	7	9
	2世	1	7	8
30-39年生まれ	3世	5	5	10
	2世	1	5	6
45-60年生まれ	3世	6	4	10
67-95年生まれ	3世	7	4	11
	計	22	32	54

\*1940-44年生まれの人、1961-66年生まれの人はなかった。

「世代」は東京に出てきた世代を一世とした。親が東京に出てきた人は二世、祖父母の代から東京に住み続けている人は三世になる。三世以上は三世に含めた。親の出生地がよくわからない場合は二世に含めた。インフォーマントの中には両親とも東京出身の方が8名あった。しかし、両親、祖父母二代続いてその全員が東京出身という話者はいなかった。祖父母の代より以前から東京(江戸)に住んでいた人は分かっただけで12名あった。この場合、父方が何代続けて東京に住んでいるかを数えており、母方についてはわからない。多くの場合話者が出身地を知っているのは祖父母の代までで、それよりさかのぼってはくわしく知らないことが多かった。

インフォーマントの生育地は、旧15区では神田区、日本橋区、赤坂区、四谷区、小石川区、本郷区、下谷区、浅草区、深川区。23区では、千代田区、新宿区、文京区、台東区、墨田区、品川区、目黒区、世田谷区、杉並区、荒川区、板橋区、練馬区、葛飾区、江戸川区で、旧15区と旧35区内の新20区の地域である。

### 3. 調査語

調査語として、親密度が高くアクセントの揺れの少ない2拍と4拍の子音語幹動詞、母音語幹動詞から、平板型アクセントと起伏型アクセントの語を1語ずつ、Online Japanese Accent Dictionary (峯松他2013)を利用して選んだ。平板型動詞は「着る、行く、教える、働く」、起伏型動詞は「見る、書く、覚える、手伝う」とした。それぞれの語について31の例文を作り、調査票を作成した。例文は否定形を中心に、動詞のアクセント型によるアクセントの違いが指摘されている「～タイ、～タクナイ」、「ナイ」のアクセントの違いが指摘されている「～テイナイ、～テナイ」を使った文である。調査では調査票を読み上げてもらい、Olympus Linear PCM Recorder LS-11にaudio-tecnicaのマイクを使用して録音した。否定形について、まず単独の辞書形と否定形を尋ね、次いで例文の形で否定の言い

切り、連体形、否定形に終助詞、接続助詞、助動詞がついた文を聞いた。具体的には以下の形式である。

- ① 動詞否定形言い切り、～ヨ、～ネ、～ノ、～カ、～ノカ。
- ② 動詞否定形+ラシイ、～ヨウダ、～ソウダ、～ダロウ、デスヨ、～ヨウニ。
- ③ 動詞否定形+ト、～カラ、～ナラ、～ノデ、～デ。
- ④ 動詞否定形+名詞
- ⑤ 動詞+タイ、～タクナイ、動詞+タイ+名詞
- ⑥ 動詞テイナイ、動詞テナイ

3年間基本的には同じ調査票を用いたが、一部例文の文言を修正したところがある。

#### 4. 動詞否定形アクセント調査結果の概要

まず、動詞否定形アクセントの分析結果の概略を述べる。従来、起伏型アクセント動詞の否定形は起伏型(例 カカ↓ナイ)、平板型アクセント動詞否定形は平板型(例 イカナイ)という対応があるとされている。この対応について調査結果を分析したところ次の点が明らかになった。

(1) 起伏型アクセント動詞否定形アクセントは全回答の90%以上が起伏型(例 カカ↓ナイ)で安定している。

(2) 平板型アクセント動詞否定形アクセントは後続する形式によって①ほぼ全員のアクセントが平板型(連体形など)②ほぼ全員が起伏型アクセント(例 イカナ↓イカラ)③平板型アクセントの話者と起伏型アクセントの話者がいる、という三つのタイプがあった。①、②は『新明解日本語アクセント辞典』(2014三省堂)等のアクセント辞書に記述されたのと同じ言い方で、ほぼ全員一致して同じアクセントである。

③は下の例に下線を引いた14例で、これにも3タイプある。一つは例に波線を引いた動詞否定形が引用の「と」に続くとき「イカナイトイッタ↓ラ/イカナ↓イトイッタラ」のどちらを使うか。高年齢層に「イカナイトイッタ↓ラ」が散見された。一つは下の下線9ダロー、下線10接続助詞トで終わる従属節末、下線14接続助詞トで終わる文末で、破線で示した。これも高年齢層にアクセント辞書にある「～ダロ↓」 「イカナイト」を使う人が散見された。もっとも多かったのは文末で動詞否定形の言い切り、否定形+終助詞を平板型アクセントでいうか、起伏型でいうかで、下線を引いた9例である。

- ・ 行かない<sub>1</sub>(「行く」の否定形)
- ・ 人ごみには行かない<sub>2</sub>。
- ・ 人ごみには行かないよ<sub>3</sub>。(「よ」が付くとき)
- ・ 人ごみには 行かない<sub>4</sub>。(「ね」が付くとき)

- ・二度と 行かない<sub>5</sub>! (強調)
- ・行かないと<sub>6</sub>言ったら (引用「と」) 行かない<sub>7</sub>! (強調)
- ・山ちゃんは 行かないと<sub>8</sub>おもう。(引用「と」)
- ・山ちゃんは 行かないだろう<sub>9</sub>。「(だろう」が付くとき)
- ・今行かないと<sub>10</sub> (接続助詞「と」)、行けないよ<sub>11</sub>。(可能形「よ」が付くとき)
- ・行かないから行けない<sub>12</sub>。(可能形)
- ・一人で 行かせられない<sub>13</sub>。(使役可能形)
- ・もう行かないと<sub>14</sub>。(接続助詞「と」で文が終わる)

主な分析対象としたのは下線の平板型アクセント動詞否定形文末(9例)のアクセントにみられる年齢による差である。3世の話者を選び年齢層別・話者別に「着る、行く、教える、働く」それぞれの否定形文末で、平板型アクセントを使った割合を比較した。図1の4枚の図に、年齢層ごとに語別に一人の話者が平板型アクセント9例に平板型を使った割合を示した。1本の線が一人の話者を表している。平板型動詞否定形は平板型で現れるのが伝統的な東京方言のアクセントである。「伝統的」というからには高年齢層に平板型の使用率が高いかと予測すると、結果はそうではない。各年齢層の話者が平板型動詞否定形で平板型を使った割合の平均を見ると、1920-1929年生まれで74%、1930-1939年生まれで66%、1945-1960年生まれで83%、1967-1995年生まれで93%と、戦後生まれの若い人ほど平板型の割合が高くなっている。若い人の方が「伝統的」な形を用いるという一種の逆転現象が見られるのである。グラフを見ると、高年齢層の話者が一律に平板型の割合が低いのではなく、平板型の割合が80~90%以上の高い人もいれば低い人もいる。対照的なのもっとも若い1967年以降の生まれの話者のグラフで、グループ内の年の差が28歳と最大であるが、所属する11人の話者の線がほとんど80%以上のところで重なっている。戦前生まれの人は個人差が大きい、戦後生まれ、とくに高度成長期に入ってから育った人は非常に個人差が小さい。規則的になったともいえる。東京方言の規則として記述されたアクセント規則が実際には一部の東京方言話者のことばに当てはまる規則だったのが、東京方言を母語とする話者の多くにあてはまる規則になったという意味である。

高年齢層に個人差が大きいという現象には次の3点が関わっているのではない。一つは明治以来東京の言葉が標準語・全国共通語として学校で教えられてきた。1925年にラジオ放送、1953年にテレビ放送が始まり、東京のことばは放送のことばとして全国で共有されるものとなった。

もう一つは、江戸時代末には100万人を超えた江戸の人口が明治時代の初めに60万人程度に減りはしたものの、それ以降第2次世界大戦直後を除いて東京の人口が増え続けていることである。東京人の自然増もあろうが、他地域からの流入がはるかに多い。最後の一つは東京にはいろいろな言葉を話す人がいることでは

図1-1 20-29年生まれ 話者別平板型アクセントの割合 (n=9)

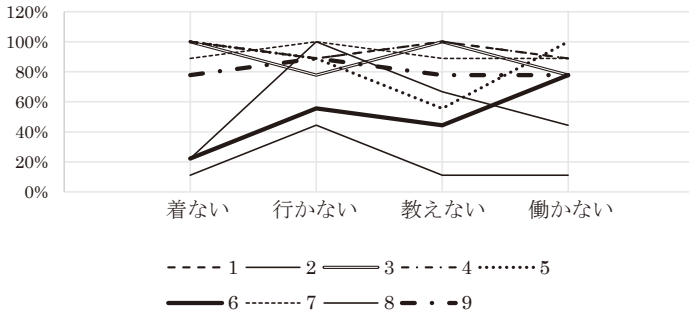


図1-2 30-39年生まれ 話者別平板型アクセントの割合 (n=10)

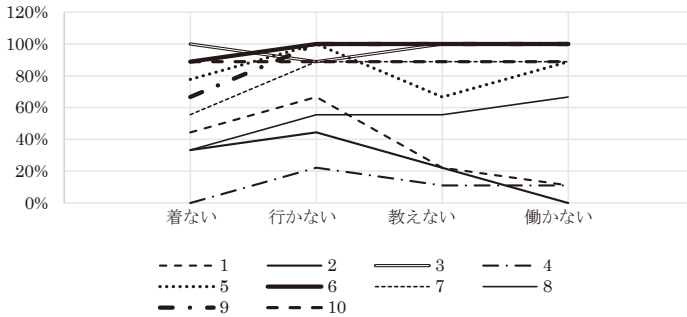
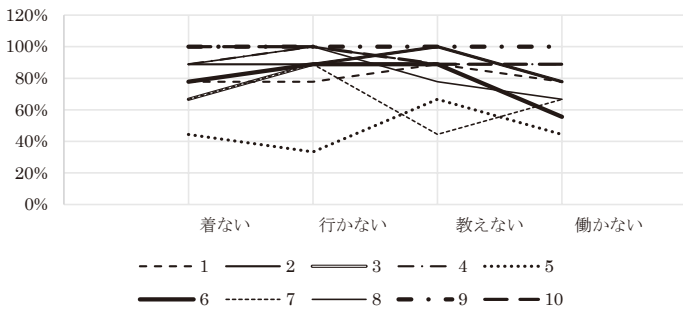


図1-3 45-60年生まれ 話者別平板型アクセントの割合 (n=10)



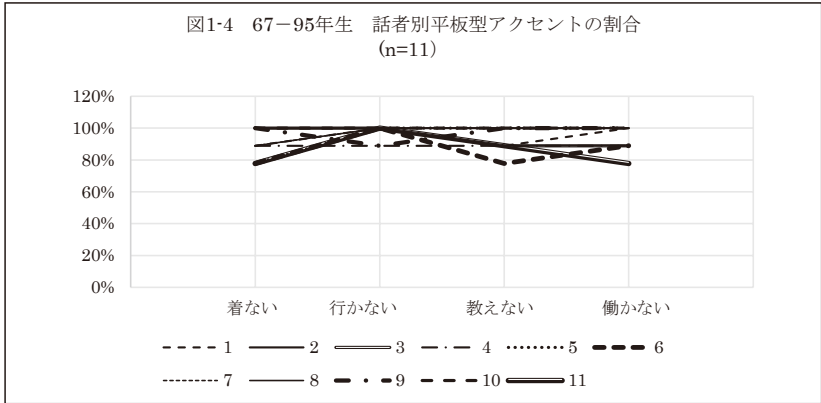


図 1 年齢層別・話者別 平板型アクセント動詞否定形 平板型の割合 (3世)

ないか。

ラジオが始まる前は東京のことばを聞くためには東京の人と直接話すしかなかった。東京に来た人が東京人から話し方を学ぶことは普通に行われていただろう。今回お話を伺った方の中にも、身近にいた東京っ子の友達の言葉遣いを学んだ人や、父親が東京に出てきて下町に住み東京ことばを覚えた人など、地元のことばを覚える努力をしたことを語る人がいた。1925年になるとラジオ放送が始まった。ラジオ受信機は初め高価だったが次第に家庭でも持てるものになり「標準語」の発音や抑揚は全国で聞かれるものになっていった。戦後1953年にテレビ放送が始まり、共通語の話しことばがいよいよ身近なものになった。

上に述べたように、東京の人口は明治の初めに100万人から60万人程度に減るものの、その後は増加を続けて1942年には700万人を超えた。昭和20年秋には350万人と半減しているが、その後はまた増え続け現在は1300万人を超えている。平成30年現在も東京への人口流入は続いている。1300万人の中には江戸時代から代々東京に住み続けてきた人もいだろうが、明治以降のどこかの時点で先祖か自分が「東京に来た」人がかなり多いと考えてよい。自分は東京のことばを話していると思う人のことばでも、細かく見れば伝統的な江戸由来の東京方言とは違っている点があってもふしぎではない。放送の始まる前は東京の人が広い範囲で東京方言のモデルを共有することはなかった。新たに東京に来た人は身近にいる東京人の話すことばを東京方言のモデルにしたらう。モデルがいいモデルかどうかは学習者には判断できない。環境によってモデルによって学習結果にばらつきが出る。それは高年齢層の回答に個人差が大きいことの一つの理由だろう。

さらに言えば、さかのぼって江戸時代にも同様の事態があったろう。「3代続く江戸っ子」という表現は、3代続いていない人が多くいるからこそ意味のある

表現になる。代々の土地っ子が大半であれば、3代目を吹聴しても自慢にならないのではないか。実際江戸には上方出身の商人、参勤交代で全国から来た武士、江戸詰めの武士、仕事を求めて地方からでてきた人などいろいろな地方出身者がいた。

また、『東京ことば辞典』（明治書院 2012）の解説で井上史夫が指摘しているようにもともと東京のことばは多様である。島嶼部、多摩地区を除いて、現在の23区内に限っても、旧15区に当たる江戸朱引きの内部にかつての下町・山の手がある。下町は江戸ことばの話し手が多く住む場所であった。山の手には明治時代大身の武士にかわって地方出身の官僚や大企業に勤める人が住むようになった。大東京35区の新20区にあたる朱引きの外側は江戸ではなく、かつては土地の人が、関東の方言である土地のことばを話していた。しかし、近代化するにつれて住民が増え都市化した。小熊英二『生きて帰った男-ある日本兵の戦争と戦後』（2015）によると「1922年に鉄道が開業した高円寺一带は、①仕立屋一家のような震災で焼け出された東京東部からの移住者、②片山家のような地方出身者、③都心に通勤する中産層、などが混在しながら急激に人口が拡張していた。」とある。高円寺のある杉並区、板橋区、豊島区、世田谷区等の新20区は郊外で、もともと土地の人がいたところに移住してきた人が増えたのである。下町からの移住もあれば他県からの移住もある。かつて東京方言話者が多く暮らしていた下町は、震災と空襲で2度にわたって壊滅的な被害を受け、多くの住民が転出した。さらに、高度成長による都心の開発、人口の増加、地価の高騰等諸般の事情で、都心の人口は減っていった。旧15区にも新20区にも、いろいろな出自の人が暮らすようになっていた。大きく言えば東京のことばといってもアクセント辞典の資料となった伝統的東京方言とは変容している可能性もある。

## 5. 伝統的なアクセントを使っていたのはどういう話者が

この調査ではどういう話者が伝統的なアクセントを高率で使っているのか。地元との関わりとことば遣いとの関連を探ってみた。Chambers (2002) の「地元度の」とらえ方にならって、話者の生育地、両親の生育地、祖父母の生育地、小学校について試みに数値を与えた(表2)。その際、合計した数値が小さいほど地元度が高くなるようにした。例えば、戦後生まれの人が23区生育(0)、両親とも15区生育(-1)、祖父母のだれかが15区生育(-1)で地元の区立の小学校(0)に行くと、地元度が-2になる。戦前生まれの人が本人が15区生育(0)、両親がその他の地方の出身(3,3)で同郷(1)、本人が区立以外の小学校(1)の場合、地元度8になる。



表2 地元度

	属性	地元度		属性	地元度
戦前生まれ	生育地		戦後生まれ	生育地	
本人、父、母	15区	0	本人、父、母	23区	0
本人、父、母	35区(新20区)	0.5	*他の項目は戦前生まれと共通		
本人、父、母	南関東	1			
父、母	北関東	2			
	その他の地方	3			
	父・母幼少から東京	0.5			
	両親東京	-1			
	祖父母	-1			
	両親東京外で同郷	1			
小学校	区立	0			
	その他	1			

ご協力いただいた54人の方の地元度は-2から8の間に分布している。その中に2世が14人、3世以上が40人含まれている。表3に2世と3世の地元度の分布を示した。2世はすべて地元度が2以上、3世は地元度-2から4の間に分布している。

なお、戦後世代と戦前世代を比べると戦後世代のほう地元度が高い傾向があった。これは戦前に生育した世代を対象に協力者を募ったときは「東京15区内生育」を条件に依頼したのに対し、戦後生まれの世代を探したときは「両親の少なくとも一方が23区内生育で、本人が23区内生育」を条件にしたため生じた偏りである可能性が高い。

表3 世代と地元度

得点合計	-2	-1	0	0.5	1	1.5	2	3	4	6	6.5	7	7.5	8
2世							2	1	1	1	1	4	3	1
3世	4	4	4	3	4	2	8	10	1					

図3に平板型アクセント動詞4語の文末9例を平板型で言った割合と地元度の関連を世代別に散布図で示した。記号1個が話者1人を表している。ひし形で示した3世以上の人が左上にまとまり、□で示した2世の人が右側にまとまっている。3世で地元度が0より小さい人は平板型の割合が80%以上のところに分布している。地元度が0から4までの人には平板型率が低い人もいるが、多くは80%以上である。3世の話者全体では平板型率が高い人のほうが多い。2世の人は地元度が2から4の人に平板率が80%以上の人が少数いる。6以上の人には平板型率が60%以下の人が多い。3世の話者のほうが2世の話者より概して伝統的なアクセントを用いた人が多いことがわかる。つまり地元度と平板型の使用率にはゆるい相関があり、地元度の高い(=数値の小さい)人のほうが概して平板型の使用率が高い。家で地元のことばを使い、地元の小学校に通って地元の友達と遊んだ

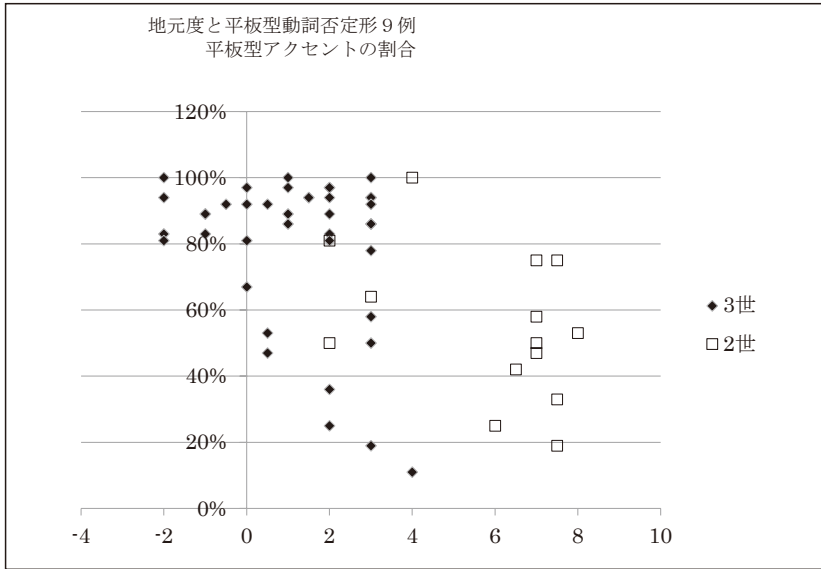


図3 地元度と平板型動詞否定形文末の平板型アクセントの割合（2世・3世）

ほうが地元のことばを覚えやすいということだろう。2世とは両親が東京に出てきた人で、全員戦前の生まれである。家庭で使われていることばが地元のことばと違うとき、地元のことばを細かいところまで完璧に覚えるのは困難があると考えられる。

平板型率が低い話者の話し方の印象が東京人らしくないかということではない。今回ご協力いただいた高年齢層の方は東京方言らしい話し方という印象だった。動詞否定形についていえば、全員が同じアクセントでなかったのは8語×31例の中の4語×14例で、それも文末でナイを平らにいうか、ナの後ろで下がるかという違いである。音声の違いとしてはそう目立たない。発音の歯切れの良さ、文全体のイントネーションや使われる表現などから東京らしいという印象を受けたのではないかと考えている。

## 6. 動詞+タイのアクセント

動詞に助動詞タイが後続するとき、動詞が起伏型アクセントか平板型アクセントかで、動詞+タイのアクセントに違いがあると言われている。動詞が起伏型アクセントの場合、終止形と連体形は「カキタ↓イ カキタ↓イコト」というように起伏型になる。平板型アクセント動詞に後続した場合は同様に「イキタイ イ

キタイトコロ」のように平板型になる。タイの否定形は、起伏型アクセント動詞につくときは「カキタ↓クナイ」、平板型アクセント動詞のときは「イキタクナ↓イ」になる。調査結果はどうだろうか。

(1) 起伏型動詞では、ミタイの否定形ミタクナイ以外、つまり「カキタイ、オボエタイ、テツダイタイ」の終止形、連体形、否定形と「ミタイ」の終止形、連体形については90%以上が通説通りのアクセントだった。ただ、ミタイの否定形には伝統的とされるミタ↓クナイではなく、ミ↓タクナイという回答が戦前生まれの話者に19例あった。戦前生まれの話者は全体で33名であり、その半数以上がこのアクセントを答えているわけであるが、どういう属性の話者がミ↓タクナイというアクセントを使うのか。比べてみてもミタ↓クナイと答えた話者との間にはっきりした属性の違いが見られない。地元度との関係を表4に示す。上段がミタ↓クナイ、下段はミ↓タクナイと答えた人の人数である。

表4 ミタクナイ アクセントと地元度

得点合計	-2	0.5	1	1.5	2	3	4	6	6.5	7	7.5	8
タ↓	2	2	0	0	2	2	0	0	0	4	2	0
ミ↓	0	0	2	2	5	3	2	1	1	1	1	1

ミタ↓クナイを使っている人に地元度得点の数値が-2の話者が2人いる。どちらも3世代以上東京(江戸)15区に住んでいる人である。ミ↓タクナイは合計が1より大きい人である。合計が1と1.5の人も3世で15区出身の人であり、ミタ↓クナイの人とどこが違うのか。一人ひとりの話者と使用したアクセントの関係を地元度で説明するのは難しい。それでも全体で地元度が最も高い話者が伝統的なアクセントを使ったことから、地元度という考え方と今回試みに使った指標の中に何か有効なものが含まれている可能性はありそうだといえよう。

戦後生まれの話者はすべてミタ↓クナイで、通説通りの伝統的もしくは規範的なアクセントになっている。ミタクナイのアクセントには年齢による違いがあり、戦後生まれの話者はアクセント辞書の記述通りのアクセントを使っているということになる。この事情は文末の平板型アクセント動詞否定形アクセントと共通している。

(2) 平板型動詞+タイの場合はどうだろう。3世の話者について平板型動詞にタイがついた文末に平板型が現れる割合を年齢層別に次ページの表5に示した。同様に表6は平板型動詞+タイ連体形、表7は平板型動詞+タイの否定形文末の場合に平板型の回答が現れた割合である。各年齢層の人数は20-29年生まれ9人、30-39年生まれ10人、45-60年生まれ10人、67-95年生まれ11人である。

表5で平板型動詞+タイ(文末)が平板型で現れた割合を示した。はっきりした傾向を指摘するのは難しい。語によって平板型の割合が異なり、イキタイはすべての年齢層でもっとも平板型が少ない。もっとも平板化率が高いのがハタラキ

表5 平板型動詞+タイ(文末) 平板型の割合

生年	着たい	行きたい	教えたい	働きたい
20-29	56%	11%	33%	78%
30-39	40%	0%	20%	40%
45-60	30%	10%	30%	20%
67-95	18%	0%	45%	64%

表6 平板型動詞+タイ連体形 平板型の割合

連体形	着たい	行きたい	教えたい	働きたい
20-29	100%	90%	89%	67%
30-39	100%	100%	100%	50%
45-60	100%	100%	90%	20%
67-95	100%	100%	91%	27%

表7 平板型動詞+タクナイ(文末) 平板型の割合

	着たくない	行たくない	教えたくない	働たくない
20-29	100%	89%	78%	56%
30-39	100%	90%	50%	60%
45-60	80%	50%	60%	50%
67-95	73%	45%	45%	55%

タイである。キの母音の無声化の影響が考えられるが、キタイ、イキタイ、ハタラキタイの違いは説明できない。オシエタイでは無声化はおこらないが平板型の割合は多くない。キタイについて見ると若い層ほど平板型の割合が少なくなっているが、他の語ではその傾向はない。

表6に平板型動詞+タイ連体形のアクセントを示した。表5と異なりある程度傾向が見える。語の長さによる違いを見ると、どの年齢層でもハタラキタイ連体形の平板型の割合が低い。それ以外の3語では平板型の割合が90-100%である。キタイは全員が平板型、イキタイは1人をのぞいて平板型、オシエタクナイは3人をのぞいて平板型である。ハタラキタイでは戦後生まれでとくに平板型が少なくなっている。全体として連体形では平板型が優勢であるが、語形が長くなると、起伏型になりやすい傾向が現れている。

動詞+タクナイはどうだろうか。平板型動詞+タクナイは伝統的にはタクナ↓イである。表7を見ると戦前生まれに伝統的なアクセントが多い。語別にみると最も高年齢の20-29年生まれでは語形が短いほど平板型の割合が高く、キタクナ↓イでは100%である。他の年齢層では戦後生まれ、長い語形でタクナ↓イの割合が低く50%程度である。キタクナ↓イ以外では～タクナ↓イ・～タ↓クナイの両方のアクセントが使われるようになっている。タイに前接する動詞のアクセント型と動詞+タイ否定形のアクセントの対応は失われつつあるといい。

## 7. 調査結果のまとめと考察

(1) 平板型動詞、起伏型動詞各4語を調査語として動詞否定形のアクセントに平板型アクセント動詞否定形は平板型、起伏型アクセント動詞否定形は起伏型という従来記述されている対応があるかどうか調べた。その結果、起伏型動詞否定形は非常に規則的に起伏型であった。平板型アクセント動詞否定形は形式によって、アクセント辞書に記述されているように①ほぼ全員が平板型になる形式、②ほぼ全員が起伏型になる形式があった。③そのほかに平板型、起伏型両方のアクセントが見られるものがあり、文末の否定形9例について年齢層別に平板型の回答の割合を比較すると、年齢層が若くなるほど平板型の割合が高くなり、もっとも若い67-90年生まれでほぼ全員が80%以上平板型の回答をしている。若い人のほうが高年齢層より伝統的な語形を使うという一種の逆転現象である。共通語教育、ラジオ・テレビの放送などの影響による共通語化と考えられる。

(2) 動詞に助動詞「たい」が後接するときも、動詞アクセントとの対応があると言われており、それを検証した。起伏型動詞につき場合はミタイ否定形以外の形式(カキタイ、オボエタイ、テツダイタイの言い切り、連体形、否定形)で通説通りの起伏型アクセントだった。ミタクナイだけ頭高型のミ↓タクナイと通説通りのミタ↓クナイの二つのアクセントが戦前生まれにみられた。戦後生まれには通説以外のアクセントはなく、平板型動詞否定形と同様に若年層のほうが「伝統的」なアクセントになっている。これも、共通語化と考えられる。

平板型動詞+タイ文末言い切りでははっきりした傾向が見いだせなかった。平板型動詞+タイ連体形では、最も長いハタラクタイで平板型の割合が他の語より少ない。とくに戦後生まれでは20-30%程度で少数派である。平板型動詞+タイ否定形は戦前世代がキタイで100%キタクナ↓イであるが、語形が長くなるほど、年齢が若くなるほど〜タクナ↓イの割合は減り半数程度である。動詞+タイでは前接する動詞のアクセント型と助動詞が付いた形式のアクセント型の対応は、高年齢層は対応のある程度維持しているが若年層では失われつつある。否定形とは違い、こちらは高年齢層にまだ見られる対応が若年層で失われるという変化だった。

ラジオ・テレビの影響で共通語化が進むのであれば、平板型動詞+タクナイについても共通語化が進んでいいはずだが、なぜこちらは前にあった対応がなくなる方向に進んでいるのだろうか。動詞連用形の子音が無声子音で母音が/i/のとき、/tai/の前で母音が無声化することも一因となっているだろうが、大きな状況として形容詞のアクセントが変わってきていることがあげられる。平板型の形容詞を中高型にいう人が多くなっている。たとえば、アツイ〈(厚い)〉をアツ↓イ、カナシイをカナシ↓イとという。そのような趨勢が動詞に形容詞型の助動詞

タイがついた語形のアクセントの影響を与えている可能性を考えている。イキタイがイキタ↓イになり、その否定形がイキタ↓クナイになるのである。タクナイのナイは形容詞であり、必ずナ↓イと下降を伴う。そのことも平板型動詞タクナイと起伏型動詞タクナイのアクセントの区別が失われつつある原因になっているかもしれない。

(3) どのような人が伝統的東京アクセントを使うのか。Chambersの「地元度の」考え方になって、本人の生育地、両親の出身地、祖父母の出身地、通った小学校などの項目に試みに数値をあたえ、合計した得点が小さいほど地元度が高くなるように設計した。動詞否定文末で平板型をつかう割合と地元度の得点との相関を見ると、ゆるい相関がみられ、例外はあるが地元度が高い人のほうが概して伝統的アクセントを答えた割合が高い。「地元度が高い」を具体的にこの調査の話者についていえば「本人が東京15区出身で、両親が東京15区出身、祖父母のどちらかが15区出身、区立の小学校に通った人」ということになる。この条件を満たせば伝統的な東京方言アクセントを持っているということではなく、伝統的なアクセントを持っている人はこういう人だったということである。

戦前生まれでミ↓タクナイを使う人、使わない人の中には属性の違いがあまりなかった。地元度が高くても低くてもミ↓タクナイ、ミタ↓クナイのどちらを使う人もいたのである。もっとも地元度が高い二人は伝統的なミタ↓クナイの使用者だったが、これが偶然でないとは言い切れない。しかし、東京方言の史的アクセントを継承している話者を探すのであれば、地元度の高い話者を探すほかないように見える。地元度については何を指標として用いるかを含め、よく考える必要がある。

#### 註

- (1) この研究は基盤研究(C)「平板型アクセント動詞否定形の非平板化に関する基礎的研究(課題番号25370424)」によって行われた。
- (2) アクセントは下がり目のみを矢印で示す。

#### 引用文献

- 金田一晴彦監修、秋永一枝編『新明解日本語アクセント辞典第2版』CD付き(2014)三省堂  
井上史雄監修、金澤伸江編『東京ことば辞典』明治書院(2012)  
小熊英二『生きて帰った男—ある日本兵の戦争と戦後』岩波書店(2015)  
峯松信明、中村新芽、鈴木雅之、平野宏子、中川千恵子、中村則子、田川恭識、広瀬啓吉、橋本浩弥「日本語アクセント・イントネーションの教育・学習を支援するオンラインインフラストラクチャの構築とその評価」、『電子情報通信学会論文誌D』, vol.J96-D, no.10, pp.2496-2508(2013)  
thhp://www.gavo.t.u-tokyo.ac.jp/ojad 2018.10.08確認  
Chambers, Jack(2002) "Regionality as an independent Variable Interlopers as Agents of Linguistic Change" §3 of "Dynamics of dialect convergence." Investigating Change and Variation through Dialect Contact., ed. Lesley Milroy, Special Issue of Sociolinguistics

6 (2002):117-130

<http://homes.chass.utoronto.ca/~chambers/regionalty.html> 2018.10.08確認

**謝辞**

旧東京女子高等師範学校（お茶の水女子大学文教育学部付属高等学校）同窓会、府立第一高等女学校（都立白鷗高校）同窓会のご協力に感謝します。